



中京大学

「将来の可能性」を評価する 高大接続入試

長期計画に則り入学者選抜を再考する

中京大学(以下、中京)は2014年開学60周年に当たり、長期計画「NEXT10」を定めた。その名の通り、次の10年で目指す内容を網羅した道標である。その中で「学生の受け入れ」と題し、入学者選抜の継続的な見直しを銘打っている段がある。ちょうど時を同じくして2014年12月、文部科学省から「新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的改革について」の答申が出たことで、どの大学でも学力の3要素をどう評価するかは至上命題となった。広報部の鳴川義雄副部長は、「本学ではここ20年間で多科目式試験の導入、入試日程変更やネット出願等、幅広い入試改革を行い、多様な方法で志願者数を伸ばしてきましたが、学部別のAPを具現化するきめ細やかな制度設計になっているとは言い難いのが実情です。文部科学省の動向も鑑み、改めて次の中京を牽引する人材をどのように定め、獲得するのかを再検討しています」と話す。

その第1弾として2018年度入試より導入するのが、その名もずばり「高大接続入試」。2016年より構想を始め、全学的な検討に先立ち、国際英語学部・経済学部・法学部の3学部が実施を決定した。入試の内容は図表にまとめたが、以下詳細を見ていこう。

3つの学部で三者三様の課題意識

国際英語学部で導入する「アクティブ型」では、二次選考に「学外施設ツアー試験」及び「プレゼンテーション」



鳴川義雄
広報部副部長

を組み込んだ。学外施設(名古屋市内もしくはその近郊)のツアーに参加し、与えられた課題にチームで取り組み、プレゼンテーションを行う中で、場に臨む姿勢や主体性・協調性等を多面的に評価する。背景にある課題意識は、「何としても海外に行きたい」「英語を使って仕事したい」というハングリー精神溢れる層の減少だ。順調な志願者数増加の側面から見えないそうした変化を感じてこの入試方法を取り入れた。これまでの入試設計では測ることのできない「周囲に刺激を与えられるタイプの学生」を評価する。「志願者をじっくり選抜するもので、評価対象はワークの成果となるアウトプットというより行動プロセスそのものです。他者からのインプットを自分なりに吸収しながら、チームで取り組むことができるかどうかを慎重に見極めます」と鳴川副部長は話す。

経済学部では「単位認定型」を導入する。高校生は大学の授業を受講し、その成績と面接で評価を行う。そこで修得した単位は入学後の卒業所要単位に認定される。特徴的なのは、オープンキャンパス等の高校生向けに作られた内容ではなく、実際に日々行われている授業に、大学生とともに高校生が参加する形式を採っている点である。「単位認定のためというのがありますが、入学後のイメージができていないと、入学後にアンマッチを起こす可能性があります。自分にとってのリアリティをきちんと作れるように、取って通常講義に参加する形式を採っています」。ベースとなっているのは、2013年よ

り中京大学附属中京高校との連携強化で取り組む7年一貫教育だ。附属高校生と大学生が同じ授業を受講する中で、高校の授業と大学の授業の違いを体感してもらい、成績評価が入学後の単位にもなるという、教育面での高大接続を担う仕組みである。5年間の

実践を経て、高校生にある程度意識付けをすると、入学後の活動の幅が広がるという確証を持ったという。「高校生の段階で大学での学びを実際に体験することで、漸く大学の教育の特色を理解することができます」との言葉通り、字面で書いてあるAPや教育内容をそのまま読んで理解するのは難しい。入学後に成長するのは学ぶ内容や雰囲気等において総じてマッチング度合いが高い学生であり、彼らに入学してもらうには体験を通して肌感覚で納得してもらう必要があるというわけだ。

法学部では「基礎力評価型」「リーダーシップ型」の2つを導入する。「基礎力評価型」の3つの型のうち「法学的思考型」では、法学を学ぶうえで必要な「法律や文献を読み解いて柔軟・的確に判断し問題を解決する能力」を評価する。手法はグループディスカッションで、事前に提示された課題文を読み解き、自らの仮説を構築し、議論するものだ。高校生段階で資質を完全に備えている学生を集めたいのではなく、そうした感性の兆しがあるかどうかを見定めたいという。「センスや感性は学力ベースの試験では測れません。グループでのパフォーマンスの中でそうした側面を見つづ、実社会で他人と協働できる下地があるかどうかを測ります」。「リーダーシップ型」でも手法としてグループディスカッションを用いて、深い思考力やチームでの主体性・協調性を評価する。

見てきたように、これらの入学者選抜はいずれも対策を講じにくく、知見や感覚を総動員する必要があるもの

図表 高大接続入試の概観

種類	学部	定員	出願	選考
アクティブ型	国際英語	5	2017年9月5日～9月18日	一次:エントリーシート、志望理由書 二次:学外ツアー、プレゼンテーション、個人面接 ※国際英語学部国際英語学科国際学専攻のみ実施
単位認定型	経済	10	2017年9月5日～9月21日	8月2・3日に開講する「経済市民の学び」を受講し、講義での成績、及び10月7日の面接等で総合的に評価
基礎力評価型	法	55	2017年10月16日～11月1日	①基礎学力型:出願書類+全教科評定平均3.0以上+国語基礎学力試験
				②法学的思考型:出願書類+全教科評定平均3.0以上+国語基礎学力試験+グループディスカッション
				③活動実績型:出願書類+高校での活動実績・資格+国語基礎学力試験+面接
リーダーシップ型		10	2018年1月5日～1月19日	出願書類+センター試験3科目+グループディスカッション

※大学HPより編集部で作成

ばかり。1対1の企業の採用活動により近い形を模索しているように見える。

10年後の入学者選抜のあるべき姿を模索する

先述した長期計画には「社会で活躍できる資質を持った人材を選抜する入試制度の検討」とある。鳴川副部長は言う。「高大接続というと、高校3年間と大学初年次を接続する雰囲気がありますが、本学ではそうではなく、入学時点で開花していなくても、大学4年間のどこかで、あるいは社会で開花するためのポテンシャルを持っているかを見ます。大学教育において基礎学力が必要な部分は大きいですが、もちろんそれだけではない。本人の成長の兆しを捉えるためにどんな手法が最適か、目的に応じた入試方式を引き続き検討していきたい」。

既存の一般入試を軸にした学力層と、学力以外の手法のプロセス評価を軸にしたポテンシャル層。名称はどうあれ、高大接続と学生の多様性確保のために入学者選抜を多様化し、集合知で社会に価値を創り出すのが私立大学であろう。志願者数を獲得するための手法を熟知している中京だからこそ、多様な目的に応じた選抜方法の開発に期待がかかる。今後の課題は初年度3学部で導入する高大接続入試を11学部に広げることだが、その先に見据えるのは2021年以降、学力の3要素評価が主軸となってからの視界である。

(本誌 鹿島 梓)